



Osaka Gakuin University Repository

Title	suddenly 考 (3) On <i>suddenly</i> : Part 3
Author(s)	黒宮 公彦 (Kimihiko Kuromiya)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 74 号 : 19-33
Issue Date	2017.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

suddenly 考 (3)

黒宮 公彦

1

黒宮 (2016, 2017) に引き続き、suddenly には「状態変化が突然であること」を表す場合と「認識の変化が突然であること」を表す場合の2つの用法があるという仮説を検証していく。そのために be と suddenly が共起している文における suddenly の振る舞いについて、British National Corpus (以下 BNC と略記する) を使ってランダムに抽出した578例¹ を対象に調査する。

2

黒宮 (2016) の繰り返しになるが、578例中 suddenly が実際に be を修飾していたのは239例のみだった。このうち suddenly が < be + 形容詞 > を修飾している73例については黒宮 (2016) で、また < be -ing > を修飾している29例については黒宮 (2017) で、それぞれすでに詳しく見た。本稿では suddenly が受動文、すなわち < be + 過去分詞 > を修飾しているものなどについて考察を加えることにしたい。

2.1 be が受動文の助動詞である場合

黒宮 (2016:6) の(8)に挙げた2つの文を以下に改めて示す。

(1) a. At the end of August 1914 he was promoted to Brigadier on the field; so suddenly that an elderly spinster had to furnish him with stars unsewn from her

father's uniform. (BNC: K91)

b. Suddenly frightened, she wondered if she was going to have an operation[.] (BNC: H7H)

これらはいずれも **suddenly** が < **be** + 過去分詞 > を修飾している例である。こうした例からも見て取れるが、**suddenly** が **be** を修飾している場合、**be** は受動文の助動詞として用いられていることが多いのではないかと予想される。事実、239例中79例で受動文の助動詞としての **be** だった。なお黒宮 (2016) で詳しく説明したとおり、(1a) (黒宮 (2016) の (8a)) の **suddenly** が何を修飾しているかは文脈から判断するしかないが、それは “was promoted” だと考えられ、**suddenly** が < **be** + 過去分詞 > を修飾している例に該当する。また (1b) (黒宮 (2016) の (8b)) に見るように明らかに **being** が省略されている文も6例見られたが、これらも **suddenly** が < **be** + 過去分詞 > を修飾している例に該当すると判断した。上に述べた79例とはこれら計7例を含めた数字である。他方 **be interested** が用いられているものが1例見られたが、この **interested** は形容詞と見なし、受動文ではなく形容詞の例に含めた。

さて、黒宮 (2016) で見たように Comrie (1976:19) は、動詞の完結相と非完結相² とが区別される言語では状態動詞の完結形が起動相を示すことがあると指摘した。しかしそれ以前に、そもそも英語の < **be** + 過去分詞 > 型の受動文は必ずしも状態受動を表すとは限らない。動作受動であることをはっきりさせるために **get** が用いられることもあるが、動作受動でもむしろ **be** を用いる方が普通だと思われる。要するに **suddenly** に修飾されている < **be** + 過去分詞 > は、原則として、状態変化を伴う受動態を表しているのであって、結果状態としての受動態ではないのである。したがって **suddenly** と共起しても何の不思議もない。換言すると、< **be suddenly** + 過去分詞 > は基本的に「状態変化が突然であること」を表すということである。何例か確認しておこう。

(2) a. I was near St Anthony's Hospital, between Bishopsgate and Bread Street, intent on lifting a purse, when my arm was suddenly seized[.]

(BNC: HH5)

b. She and Ethel were halfway down the next flight of stairs when they were suddenly joined by Bryce.

(BNC: AN7)

c. If you were suddenly faced with an emergency, would you know how to cope?

(BNC: G2T)

なお黒宮 (2016:10-11) では状態変化を「物理的な状態変化」と「人間の内面における変化」とに分けて考えるべきだと主張したが、(2a, b) は物理的な状態変化の例だと言える。他方 (2c) は物理的な変化に重点が置かれてはいるものの、その状態変化に対して「緊急事態が発生した」と認識する人間が存在して初めて成立する事態でもあるので、人間の内面の変化もある程度絡んでいる。そして中には次の(3)のように人間の内面の変化に重点が置かれていると考えられる例も見られる。

(3) a. I was suddenly filled with fear and doubt. (BNC: GUW)

b. Halfway up she paused, fighting for breath, suddenly struck by the enormity of what she was doing. (BNC: JYC)

c. How poisoned all my thoughts suddenly are, thought Ludens.

(BNC: APM)

黒宮 (2016) では < be suddenly + 形容詞 > を分析したが、その中で状態変化には物理的なもののみならず人間の内面における変化もあることを認めたのだった。そして過去分詞はある面で形容詞に似た性質を持っているのだから、形容詞の場合と同様 < be suddenly + 過去分詞 > にも人間の内面の変化を表す例があっても不思議ではない。実際 (3a) の “was suddenly filled with” は

“was suddenly full of” と言い換えることも可能ではないかと予想される。もっとも、状態受動を表す < be + 過去分詞 > の過去分詞が形容詞に似ているのは確かだが、すでに述べたとおり < be suddenly + 過去分詞 > は基本的に動作受動文である。このため < be suddenly + 形容詞 > と比べ、突然の状態変化ということに関して解釈しづらい例は少なかった。

さて、79例中5例は少々特殊なものである。次にこれら5例について見ていきたい。

2.1.1 完了受動形と suddenly との共起

まず、suddenly が完了受動形の動詞に掛かっている例文が3例見られた。これらはすべて動作受動であって状態受動ではないと思われるが念のために見ておく。

(4) a. [...]said Archie, highly gratified that things had suddenly been made easy for him. (BNC: CKE)

b. [...]those of us who had that upbringing about the purity of that Royal Family that's suddenly been confronted with this image[...] (BNC: J40)

c. The sphere of influence has suddenly been increased and another 300,000 people are likely to be attracted towards Hull. (BNC: B1H)

(4a) は過去完了の受動態の例である。これは “said Archie” が過去の出来事であり、その過去の時点から見て “things had been made easy for him” はさらに過去のことであるため、いわゆる「大過去」を表すために過去完了が用いられていると考えられる。つまりこの過去完了形は完了のアスペクト³というよりはむしろ前過去⁴の時制を示すものであると言える。そうであれば受動形の方も前節で確認したのと同様の動作受動の例であろう。もっともこの例もそれほど単純ではない。物事が何らかの変化をしたのは確かであり、それは

“said Archie”よりも前の時点のことであるが、その変化の結果を Archie が “easy for him”だと認識したのは “said Archie”と同じ時点だというのは十分にあり得る。ここに suddenly が加わると、果たして状態変化が突然だったということなのか— (4a) を文字通りに受け取ればそうなる—それとも “said Archie”の時点で「物事が自分にとって楽な方向へと変わった」と突然認識したということなのか、判然としない。どちらにも受け取れるように思われる。

他方 (4b, c) は現在完了の受動態の例⁵である。英語の現在完了形には完了・結果・経験・継続の4つの用法があるとよく言われるが、suddenly と共起しているということはこのうちの完了の用法だと考えられる。また受動形については、現在完了形とともに用いられているため、「～という変化が起こった」という動作受動の意味と「その結果状態が今も継続している」という状態受動の意味の両方を併せ持っているように感じられる。つまり「変化が今まさに、突然起こったところであり、その結果・影響は現在はもちろんのこと、今後も当面は継続するだろう」というニュアンスを帯びているように思われる。その中で suddenly は動作受動、すなわち「変化が今まさに起こったこと」の側面を修飾していると考えられ、結局 (4b, c) のような現在完了の受動態であっても suddenly が修飾しているのは動作受動だということになる。

2.1.2 進行受動形と suddenly との共起

黒宮 (2017) でも触れたが、わずか2例ではあるが suddenly が進行受動形 (progressive passive) の動詞に掛かっている例が見られた。以下にそれを示す。

(5) a. But suddenly the D word is being dropped in fashion[.] (BNC: CGC)

b. By 1844, when Wordsworth so fiercely objected to the coming of the railway, many more people were being attracted not just for the natural attributes of the area but for all those extra attractions which were suddenly being introduced such as ‘wrestling, horse and boat races, and pot-houses and beer-

shops.’

(BNC: B3H)

この進行受動形についてはQuirk *et al.* (1985:159) やLeech *et al.* (2001:364) 等で言及されているが、そのようなものがあると述べられているだけで、その機能については特に何も述べられていない。ここから進行受動形は単に「受動態でかつ進行相」を表すのみで、それ以上の特殊なニュアンスを帯びてはいないと予想される。幸いSwan (2005:386) がこの点について明確に述べている。

(6) Passive tenses are normally used in the same way as active tenses. So for example the present progressive passive is used, like the present progressive active, to talk about things that are going on at the time of speaking[.]

つまり能動態であれ受動態であれ、進行相を表しているという点では大差ないということだ。

進行能動形と *suddenly* との組み合わせについては黒宮 (2017) で詳しく扱った。その中で、動詞の表す動作が意図的に行われるものかどうかで次の4つに分けるのが重要だと述べた (黒宮 (2017) の(6))。

- (7) a. 認識者が動作主で、動作が意図的に行われるものである場合
- b. 認識者が動作主で、動作が意図的に行われないものである場合
- c. 認識者が動作主でなく、動作が意図的に行われるものである場合
- d. 認識者が動作主でなく、動作が意図的に行われないものである場合

これはあくまでも動詞が能動態であることを前提としていた。受動態には動作主を焦点から外し背景に回す機能があるので、受動文では動作主が明示されないことも多い。このため動作主の意図性も背景に押しやられてしまう。結果

として受動文については (7b) か (7d) かのいずれかだということになる。加えて、動作主の視点から動作を認識する場合に受動態で表現されるとは考えにくい⁶ ので、結局進行受動形と suddenly とが共起する場合は (7d) が基本となると予想される。その上で黒宮 (2017) の議論を考慮に入れると、進行受動形は「いつの間にやら急に～されている」という意味を表すのではないか。つまり通常受動文における suddenly は2.1節で見たように突然の状態変化を表すのが基本だが、進行受動文における suddenly は突然の認識の変化を表すのが基本だと考えられる。わずか2例から結論を導くのは性急に過ぎ危険ではあるが、少なくとも(5)に関してはこの解釈が当てはまる。

2.2 be NP と suddenly との共起

suddenly が be を修飾している239例中わずか13例ではあるが、be NP、すなわち名詞句が後続している be を修飾しているものが観察された。わずかな例から結論を導き出すことはできないが、ある程度の傾向は認められるように思われる。

まず、名詞句が主語の本質的な属性を示している例が比較的多く見られた。モノにとって最も本質的な属性は「モノがそれ自体であること」であるが、このような「Xが突然それ自身になった (戻った)」、あるいはその否定形で「Xでなくなった」という、同語反復文にも似た例が2例ではあるが見られた (次の (8a, b)) のはとりわけ興味深い。

(8) a. And suddenly, I was that same, frightened Dorothy all over again.

(BNC: A0F)

b. And suddenly, the great steel hulk was no longer a hulk. (BNC: BPA)

c. Hollywood Indians aren't what they used to be. First, they're not Indians but Native Americans. Second, they're no longer played by ugly gits like Charles Bronson, but by pretty ethnics such as Lou Diamond Phillips who

can plausibly claim to have Cherokee blood somewhere in their veins (it was this which landed Phillips the lead in *The Dark Wind*, the recent Robert Redford-backed adaptation of one of Tony Hillerman's Navajo detective novels). Third, they are suddenly the good guys. No longer murderous savages or martyred innocents, they are now Nineties guys in touch with their inner feelings as well as the outer fringes of the ecology movement. (BNC: CD5)

d. And suddenly it wasn't a play any more. (BNC: G3E)

(8c) で直接問題となるのは“they are suddenly the good guys”の箇所だが、これだけでは判然としないので前後の文脈を少々長めではあるが引用した。the が用いられていることと、前後の文脈から判断すると the good guys はインディアン (ネイティブアメリカン) の本当の姿を指しているとも考えられ、(8c) も (8a, b) の類例だと言える。(8d) も「もともと遊びであったはずのものが突然遊びでなくなった」ことを表しているから類例である。

次に、主語が節である例が多数観察された。こうした例の中にはある種の分裂文や文法上の主語が仮主語の it であるような例も含まれる。そうした文は「～することは突然～になる」という意味を表すわけである。

(9) a. Suddenly, though, trading one career for another is no longer just a way to obtain release from a boring job. (BNC: BMB)

b. Suddenly, all he was aware of was one single, frozen thought[.] (BNC: AC4)

c. It was suddenly a great relief to be able to speak the truth. (BNC: B0U)

d. [S]uddenly to walk in and to see a sea of faces, all of whom I knew well, was the most tremendously stirring moment. (BNC: G2E)

上記 2 タイプのいずれにも当てはまらないものは次の 3 例のみだった。

(10) a. His death was suddenly the birth of a whole new cult. (BNC: CDG)

b. The image of the planet receded and Tarvaras was suddenly a component of a larger system. (BNC: FSE)

c. Disaster recovery is suddenly big business, with even users of machines as small as the IBM Corp RS/6000 wanting the security of a share of a back-up system[.] (BNC: CST)

いずれにせよ < be + 名詞句 > の名詞句は形容詞的な役割を果たしていると言える。< be suddenly + 形容詞 > については黒宮 (2016) で見たが、その多くは be が「なる」の意味を表し、suddenly が突然の状態変化を表している例だった。これと同様に < be suddenly + 名詞句 > も be が「なる」、suddenly が突然の状態変化を表しているものが多い。(9b-d) や (10b) などはその例だと言えよう。認識の変化もある程度は関わっているのかもしれないが、少なくとも前面には押し出されてはいないように感じられる。

ただし両者には違いもあって、形容詞の場合は状態変化が瞬間的に生じても不思議でないものが多い。特に、黒宮 (2016) で見たように、quiet や silent、あるいは voice を主語とした harsh、人の態度、とりわけ話し口調を形容する serious など、音に関連した形容詞と suddenly との組み合わせが多く見られた。音は生じるとすぐに耳に届くものである⁷、変化が起こった時点と認識者がそれを認識する時点とにずれがほぼない⁸。これに比べると < be suddenly + 名詞句 > の名詞句の場合は変化に時間の掛かるものが多い。例えば (10a) で、「彼」の死によって新たなカルト集団が突然誕生したのだとしても、その「突然」とは決して瞬間的なものではあり得ないし、おそらく1日や2日で生じた変化でもないだろう。あるいは (8c) にしても、それまではハリウッド映画の中で差別的な扱いを受けてきたたネイティヴアメリカンがある日を境に突然まったく差別のない描かれ方をするようになったわけではないだろうし、ましてやそのような変化がある瞬間に生じたはずもない。なのでこうし

た例では認識者が変化前の状態と変化後の状態とを捉え、変化前の状態が続いた時間に比べ変化に掛かった時間がごく短かったことや、変化が予測不能で意外だったため結果として唐突に感じられたことなどを総合的に判断した結果、相対的に **suddenly** だと認識されてそう表現されたのだと考えられる。

我々は時間を掛けて徐々に進行していく変化に対して「いつの間にか、気がついたら変わっていた」という反応を示すことが多い。それが予想外のことであれば「突然」と表現しても不思議ではない。となると < **be** + 名詞句 > を修飾する **suddenly** はむしろ認識の変化を表すのではないかと予想されるが、実際には判断に迷う例が多い。これは筆者が黒宮 (2017) で述べた、認識者が事態を内側から主観的に捉えるか、外側から客観的に眺めるかの違いと関連していると考えられる。(8a) は主語が I であるので分かりやすい。明らかに認識者が事態を内側から捉えている例であり、「自分がいつの間にか以前の **Dorothy** に戻っていることに気づいた」ということだから認識の変化だと言える。これに対して (8c) は、上に述べたとおり 1 日で生じ得るような変化を表しているわけではないが、それでもハリウッド映画界における客観的な変化について述べており、認識の突然の変化というよりは、ハリウッド映画の長い歴史から見ると相対的に短い期間に生じた急激な変化ということで **suddenly** が用いられていると考えられる。(9a) や (10a, c) も同様の例だと言ってよいだろう。そして (8b, d) はこれらの中間、すなわち認識者が主観的に捉えているとも客観的に捉えているとも受け取れる例である。どちらになるかは文脈にもよるし、黒宮 (2017) で論じたように、読者が認識者と認識を重ね合わせて主観的に受け止めるか、あくまでも事態を客観的に眺めるかによっても変わってくる。

2.2.1 **be of NP** と **suddenly** との共起

わずか 1 例ではあるが **be of NP** が **suddenly** と共起している例が見られた。

(11) Quite suddenly whether Anne worried or what she thought were not of the least importance. (BNC: H0F)

これはいわゆる疑似分裂文であり、しかも **not** と **least** で実質上二重否定になっていて、加えて **suddenly** は **quite** で修飾されているなど様々な意味で変則的な文ではあるが、**be of importance** は **be important** とほぼ同じ意味を表すのだから、< **be suddenly** + 形容詞 > に準じるものと考えていだろう。すでに述べたように < **be suddenly** + 形容詞 > では **be** が「なる」を意味し、**suddenly** が突然の状態変化を表している例が多く観察されたわけだが、(11)でも同様に **be** は「なる」を意味している。また状態変化については（物理的変化ではなく）黒宮（2016）で見た「人間の内面における変化」だと考えられる。

なお **be suddenly** + 前置詞 + 名詞 > というパターンのうち、前置詞が **of** 以外のものについては **be** が「存在」を表すものだった。こうした例についての考察は紙面の都合上「suddenly 考 (4)」に譲りたい。

2.3 **be as though** と **suddenly** との共起

be に **as though** 等「まるで～のような」という表現が後続するものと **suddenly** とが共起している例が4つではあるが見られた。内訳は **as though** が2例（うち1例では“**a though**”と明らかな誤記が認められる）、**like** が1例、**if** (**as if** の意味で用いられているもの。もしかするとこれも誤記かもしれない) が1例である。

(12) a. Suddenly it was as though they weren't enemies at all, but locked in a passionate, warm embrace. (BNC: JXT)

b. As I looked closer they began to open their wings, and suddenly it was a [*sic.*] though purple brooches had been pinned about the bracken to catch the

sunlight. (BNC: BMD)

c. Suddenly it was like living out a Grade B TV movie. (BNC: CDX)

d. The dream lingered through the endless moments while I trudged up the clinging sand, seeing our little cottage grow larger and more ominous, till suddenly it was if the film director grew tired and cut to me opening the cupboard door and peeping out. (BNC: H8M)

いずれの例も主語はその場の状況を表す *it* であり、また *suddenly* は *it* の直前に置かれているという共通点がある。*be* は「なる」、*suddenly* は突然の状態変化を表しており、全体で「状況が突然まるで～のようになった」という意味となることも共通している。もっとも「AはBのようだ」というのは客観的なものではなく、認識者が主観的にAとBとの間の類似性を捉えて表現したものであるから、黒宮 (2016) で論じた「物理的な状態変化」と「人間の内面における変化」の二重構造になっていると考えられる。つまり物理的な状態変化は、それはそれで生じているのだが、その変化を「どのような変化と捉えるか」という側面に関しては認識者の主観的・心理的な判断が関わっていると言える。

3

本稿をまとめると以下になる。まず *suddenly* が受動文を修飾している場合には基本的に状態変化が突然であることを表している。ただし *suddenly* に修飾されているのが進行受動文の場合は— 具体例が少ないので明言はできないが— 黒宮 (2017) で見た *suddenly* に修飾されている進行能動文と同様に、認識の突然の変化を表す傾向が見られる。

また *suddenly* が < *be* + 名詞句 > や < *be of* + 名詞句 > < *be as though* 等 > を修飾している場合も基本的には *be* は「なる」、*suddenly* は突然の状態変化を表していると言える。もっとも < *be* + 名詞句 > の場合は突然の認識の

変化を表す例も散見され、両者の違いには文脈や認識者および読者による事態の捉え方が関わっている。

(「suddenly 考 (4)」に続く)

注

- 1) この点については黒宮 (2016) を参照のこと。
- 2) 黒宮 (2016) 注3および黒宮 (2017) 注3の繰り返しになるが、ここでいう「完結相」「非完結相」とはそれぞれ **perfective**、**imperfective** のことであって、とりわけ前者は英語では「**have** + 過去分詞」で示される **perfect** のことではないので注意。
- 3) この「完了」は **perfect** のことである。上記注2も参照のこと。
- 4) 過去のある時点から見てさらに過去の出来事を表す時制をいわゆる学校文法では「大過去」と呼ぶが、言語学では「前過去」と呼ばれることが多いように思われる。
- 5) 因みに (4b) は会話文から取られたものであり、前後を省略したが、文法的に見るとおかしな点が多々ある例文である。
- 6) この点については、我々がいかにして認識者を特定しているかを考えると納得できよう。黒宮 (2017) でも触れたが、認識者が動作主だと判断されるのは (i) 文の主語が I であるか、(ii) 小説等において、文の主語が三人称ではあるが、作者がその人物の視点から出来事を捉えて表現している場合のみ当てはまる。他方、受動態とは焦点が動作主ではなく被動作主に当たっていることを示すものであり、主語も被動作主になるから、我々是否応なく出来事を被動作主の視点、もしくは客観的な視点から捉えることとなる。したがって受動文で表される事態を動作主の視点から認識するのは困難だと言える。
- 7) 音と **suddenly** との関わりや視覚によって捉えられるものとの違いについ

ては「suddenly 考 (4)」で取り上げる予定である。

- 8) ただし「音がすること」と認識との間にずれが生じることはあり得る。黒宮 (2017) の (1e) の例文を参照のこと。

引用文献

British National Corpus <http://www.natcorp.ox.ac.uk/>

参考文献

Comrie, Bernard (1976), *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.

Croft, William (2012), *Verbs-Aspect and Causal Structure*, Oxford: Oxford University Press.

Dowty, David R. (1979), *Word Meaning and Montague Grammar*, Dordrecht/Boston/London: D. Reidel Publishing Company.

黒宮公彦 (2016)、「suddenly 考 (1)」、『大阪学院大学外国語論集』第72号、pp.1-17.

—(2017)、「suddenly 考 (2)」、『大阪学院大学外国語論集』第73号、pp.49-64.

Leech, Geoffrey, Benita Cruickshank, Roz Ivanič (2001), *An A-Z of English Grammar & Usage*, new edition, Essex: Pearson Education Limited.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman.

Swan, Michael (2005), *Practical English Usage*, third edition, Oxford: Oxford University Press.

Vendler, Zeno (1967), “Verbs and Times”, in *Linguistics in Philosophy*, Ithaca, New York: Cornell University Press, pp.97-121.

On *suddenly*: Part 3

Kimihiko Kuromiya

This article proposes that the word *suddenly* has two senses, one which represents an instantaneous change of state, and the other describing a speaker's realization of a change of state that has already taken place before the utterance.

In Part 3 we will continue to verify the proposal above through observing some more sentences, taken from *British National Corpus*, where *suddenly* modifies <be + Past Participle>, <be + Noun>, etc.